

学位論文要旨

送り手の性役割期待を内包する言葉かけが
受け手に与える影響

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 学習開発学分野
学習開発基礎・支援領域

D164953 吉岡 真梨子

学校現場において、日常的に生起する多様な言葉かけの中には、性役割期待が内包されている言葉かけも生起していると考えられる。性役割学習には自分の性に期待される役割の認知、およびその役割を演ずるという2つの過程が含まれていることが明らかにされており（柏木，1967）、性役割期待が内包された言葉かけを受けた場合、受け手は自己呈示としてその役割を演じる可能性がある。松本（2002）は、伝統的性役割期待を受けた場合は伝統的な自己呈示を行い、逆に非伝統的性役割期待を受けた場合は非伝統的な自己呈示を行うことを明らかにした。一方で、相手の期待が到底容認できないものであった場合には、より一層非伝統的性役割に立った自己呈示を行う可能性があるとも指摘している。また、性役割期待に関連する先行研究の多くが、実験操作として刺激人物の性役割観や実験参加者の性別を強調した刺激の提示を用いており（例えば、Riemer, Chaudoir, & Earnshaw, 2014；森永・坂田・古川・福留，2017）、性役割期待であることが明示されていた。

これらの課題を踏まえ、本研究では、暗黙の性役割期待を内包した言葉かけを、送り手の性役割観が内包されたものであり、受け手に対してジェンダー・ステレオタイプを期待するものでありながら、性役割としての期待であることが明示されていない言葉かけであるとし、その影響を自己呈示およびパフォーマンスの側面から検討した。加えて、受容の範囲である受け手の性役割観によって差が生じるかを明らかにした。また、児童期から青年期にかけて受動的な性役割取得から主体的能動的な性役割学習へと変化が生じること（柏木，1967）、性役割認知の発達には被験者の性による差があり、男子では年齢による変動が顕著であること（柏木，1972）から、性役割取得から性役割学習への移行期にある青年期前期の中学生男女と、より主体的能動的な性役割学習段階にある青年期後期の大学生男女を対象とし、発達段階による差および性別による差を検討した。

第1章 序章

第1章では、学校現場において性役割期待として表れる言葉かけにふれ、性役割学習について概観するなかで、性役割期待が自己呈示に影響を及ぼす可能性について述べた。また、性役割期待が及ぼす影響を検討する際、受け手自身のもつ受容の範囲を考慮する必要があることを述べた。そして、従来に関連研究(例えば, Riemer, Chaudoir, & Earnshaw, 2014; 森永・坂田・古川・福留, 2017)では明示的な性役割期待の影響が検討されていたことや、受け手に対して潜在的にステレオタイプを伝える好意的性差別は受け手のパフォーマンスや意欲を低下させるといった研究(Dardenne & Dumont, 2007; 森永・坂田ら, 2017)を示すことで、暗黙のうちに伝えられる性役割としての期待が自己呈示およびパフォーマンスへ及ぼす影響を検討することの重要性を指摘した。また、性役割の発達について概観することで、発達段階や性別による差の存在を示し、同年代の異性からの性役割期待が性役割に関する自己呈示に影響していることを明らかにした。最後に、先行研究における課題を整理し、本研究の目的を以下のよう示した。

本研究の目的は、青年期前期および後期の男女を対象として、同年代の異性からの暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが受け手の自己呈示およびパフォーマンスに及ぼす影響を検討することである。あわせて、受け手の性役割観に着目し、伝統的性役割観の高さによって自己呈示に差がみられるかを検討する。これにあたり、研究Iから研究IVによって以下を明らかにする。

研究I 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、青年期前期の中学生男女の自己呈示がどのように影響を受けるか明らかにする。

研究II 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、青年期後期の大学生男女の自己呈示がどのように影響を受け、変化するか明らかにする。

研究III 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示に及ぼす影響について、発達段階による差がみられるかを明らかにする。

研究IV 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、自己呈

示やパフォーマンスがどのように影響を受け、変化するか実験的に検討する。

第2章 実証的研究

第2章では、以下の4つの実証的研究について示した。

第1節の研究Iでは、性役割学習への移行期にあると考えられる青年期前期の中学生を対象とし、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、自己呈示がどのように影響を受けるかについて検討した。その際、(1)暗黙のうちに伝えられた性役割期待を内包する言葉かけであっても、受け手はその性役割期待に沿った性役割に関連する特性の呈示を行うのか、(2)性別や伝統的性役割観の高さによって、言葉かけを受けた後の自己呈示に差がみられるのかの2点に着目した。検討するにあたり、Figure 1のような場面を設定し、性別ごとに伝統的性役割条件と非伝統的性役割条件を設けた。

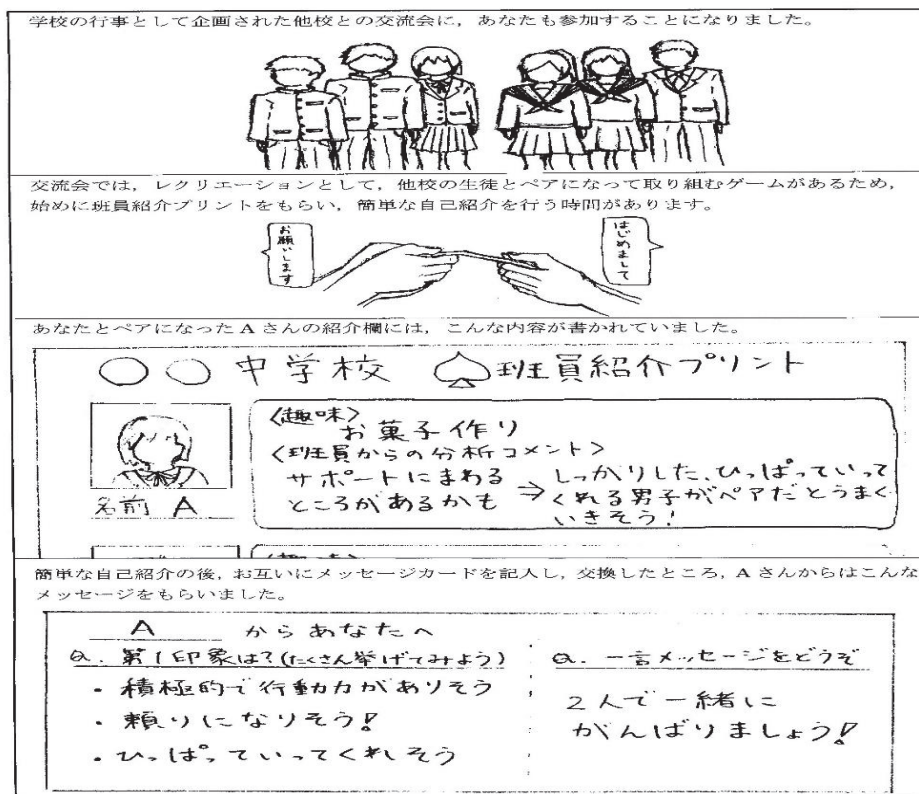
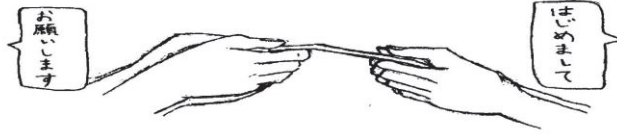


Figure 1 男性中学生を対象とした伝統的性役割条件の4コマストーリー


調査協力者の性役割に関する特性についての自己呈示を調査するために、M-H-F scale（伊藤，1978）の30項目（Masculinity 10項目，Humanity 10項目，Femininity 10項目）を用いた。教示文は「ストーリーを読んで，あなたはA/Bさんに対して，自分自身をどのような人間に見てもらいたいと考えていますか？次のような形容詞がそのイメージにどの程度当てはまると思うか，もっとも近い数字を○でかこんでください」である。調査協力者は，中学生男子77名，女子74名の計151名であった。性別×性役割条件×伝統的性役割観HLの3要因分散分析を行った。その結果，青年期前期にある中学生が性役割期待を暗黙裡に受けた場合，女子中学生は，非伝統的な性役割期待を受けた際にその期待に沿った特性を演じやすいことが明らかになった。対して，男子中学生では期待に沿った伝統的な性役割特性の呈示がみられなかった。このことから，特に男子中学生がどのように性役割特性を取得し，自らの性役割として取り込んでいくのか，発達段階に着目した検討が必要であることが明らかになった。

第2節の研究IIでは，より主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の大学生を対象とし，研究Iと同様の2点に着目して検討した。また，研究IIでは，暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによって呈示が高まるかについて，事前事後の測定を行うことにより詳細に検討した。場面設定については，ストーリーに違和感が生じないように，研究Iとは異なるFigure 2のようなストーリーを作成した。

この春、大学へ入学したあなたは、オリエンテーションの一環として、学生間で行われる交流会に参加することになりました。交流会では、新入生同士でペアになって取り組むゲームが行われるため、はじめに自己紹介とメッセージを書いたカードを交換することになりました。



あなたとペアになった A さんの自己紹介欄にはこんな内容が書かれています。

新入生 オリエンテーション ～ペアで優勝を目指せ～	
 名前 (A) 似顔絵 フェンジ	Q. 趣味は? プラモデル作り
	Q. 長所は? テキパキしている 自己主張ができる
	Q. 自分と息が合いそうなタイプは? 温和なやさしい女の子

簡単な自己紹介の後、お互いにメッセージカードを記入し、交換したところ、A さんからはこんなメッセージをもらいました。

A から あなたへ	
Q. 第1印象は? (たくさん挙げてみよう) <ul style="list-style-type: none"> ・明るくてやさしそう! ・気がききそう ・相手の立場に立って考えてくれそう 	Q. 一言メッセージをどうぞ 2人で一糸者に がんばりましょう!

Figure 2 女子大学生を対象とした伝統的性役割条件の3コマストーリー

調査協力者の性役割に関する特性についての自己呈示は、研究 I と同様に、M-H-F scale (伊藤, 1978) から 25 項目 (Masculinity 9 項目, Humanity 6 項目, Femininity 10 項目) を用いて、7 件法で測定した。なお、研究 II では、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによる影響をみるため、pre/post の 2 回、測定を行った。調査協力者は、男子大学生 58 名、女子大学生 121 名の計 179 名であった。

各性役割に関する特性について、pre/post × 性別 × 性役割条件 × 伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行った。その結果、主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の女子大学生においても、送り手の性役割期待に沿うような性役割特性の呈示を行うことが明らかにされた。一方、男子大学生については伝統的な男性役割に縛られ、女性役割特性を受容していないことが示唆された。また、人間性の呈示が青年の適応に重要な役割を果たす可能性が示唆された。伝統的性役割観の影響については、非伝統的性役割を期待された場合であっても、伝統的性役割観の高い人の

ほうが低い人よりも男性役割特性を高く呈示していたことが明らかになった。このことから、伝統的性役割観の高い女性は、男性役割特性を新たな女性役割特性として取り込み、主体的かつ積極的に男性役割特性の呈示を行っている可能性が示唆された。

第3節の研究IIIでは、研究I, IIのデータに基づき発達段階による差を検討した。その結果、暗黙の性役割期待が性役割特性の自己呈示に及ぼす影響には、発達段階によって違いがあることが明らかになった。特に、男性において発達段階による差が顕著であった。男子中学生は主体的な性役割学習への移行が遅い一方で、身体的には第二次性徴をむかえるため、周囲から男性役割期待を受ける機会が増加する可能性がある。青年期後期にある男子大学生の結果も踏まえると、男性が青年期前期に受けた男性役割期待は、受動的な男性役割の取得を促し、のちに自己呈示を通じた伝統的な性役割の強化、再生産へとつながっていることが考えられた。これまで、従来の関連研究ではあまり着目されてこなかった男性についても対象として検討していくことの重要性が示されたといえる。なお、中学生と大学生の発達差を比較するにあたり、世代背景等、年齢以外の点で差がある可能性も考えられることに留意する必要がある。

第4節の研究IVでは、青年期後期の大学生を対象とした実験を行い、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、自己呈示やパフォーマンスがどのように影響を受け、変化するのかを検討した。実験では、性別ごとに作成した伝統的あるいは非伝統的刺激動画を用いて、自己呈示およびパフォーマンスを測定した。実験への参加を承諾した大学生は女性33名、男性20名の計53名であった。

性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の3要因分散分析を各性役割特性における自己呈示およびパフォーマンスについて行った。その結果、研究IIと同様、研究IVにおいても、伝統的性役割観の高い女性が、男性役割特性を新たな女性役割特性として取り込み、主体的かつ積極的に男性役割特性の呈示を行っていた可能性が示唆された。また、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによってパフォーマンスの低下が起こる可能性が示され、課題の性質や必要とされる能力によってその影響は異なることが示唆された。

しかし、群間に差はみられなかったため、受け手の性別や性役割観、期待の種類による違いは確認されていない。今後は、サンプルサイズを増やし、課題の性質など複数の観点からパフォーマンスへの影響を検討していく必要がある。

第3章では、第2章の実証的研究における結果に基づき、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが受け手の自己呈示とパフォーマンスに及ぼす影響について、発達段階や性別、伝統的性役割観の高さによる差を含めた総合考察を試みた。

本研究の意義として、以下の点があげられた。まず、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけであっても、その期待に沿った呈示を行うことが示された。性役割期待に関する多くの研究では、実験操作として刺激人物の性役割観や実験参加者の性別を強調した刺激の提示が使われ（例えば、Riemer, Chaudoir, & Earnshaw, 2014；森永・坂田ら, 2017）、その影響について検討されてきた。本研究では、これらの先行研究のように明示的な性役割期待でなくとも、受け手は暗黙の性役割期待に沿った呈示を行うことを明らかにした。特に、女性は発達段階に関わらず、送り手の期待に沿った呈示を行っていた。このことから、女性は、周囲による暗黙の期待に沿って自らの性役割を学習しやすいと考えられるため、暗黙裡であっても伝統的な女性役割を期待されることが多ければ、自己呈示を通して女性役割が再生産されうるといえる。しかし、男性役割についても積極的に受容していることから、周囲からの影響を受けやすい反面、柔軟に性役割を学習し呈示することができるといえる。対して、男性は、発達段階による差が顕著であり、青年期後期の大学生において男性役割にしばられ、女性役割を受容しにくいことが示された。従来に関連研究ではあまり着目されてこなかった男性についても対象として検討していくことの重要性が示されたといえる。また、本研究では、自己呈示について伝統的な性役割特性の3側面を取りあげることによって、女性が特に男性役割特性を用いて期待に対応した呈示を行っていることを明らかにした。他者の性役割期待に沿う自己呈示が行われることを見いだした松本（2002）の研究で

は、女性を対象として、女性役割観にもとづいた自己呈示を尋ねていたため、男性役割特性の自己呈示については検討されていなかった。本研究の結果は、先行研究のように性別に対応する役割の呈示にのみ着目するのではなく、多面的に性役割に関する呈示を検討していく必要性を示すものである。性役割特性の呈示を組み合わせる印象を調整しているのかなどの検討を可能にし、新たな視点から性役割期待が自己呈示へ及ぼす影響を明らかにすることができたといえよう。

本研究の課題として、以下の点が挙げられた。まず、研究Ⅰ、研究Ⅱで質問紙調査を行うにあたり、場面想定ストーリーとして刺激人物の紹介を挿入したが、刺激人物の紹介の情報をどの程度自己呈示の参考にしたのか、最後のコマの刺激コメントを男性/女性役割への期待だと捉えたかなど、調査協力者の認知について操作チェックを行わなかった。理由として、調査協力者の認知を誘導せずに、上記の2点を確認することは困難であることが挙げられる。しかし、これにより実験手続きにおいて以下の課題を抱えざるをえなかった。すなわち、調査協力者に向けられた暗黙の性役割期待以外の影響を排除できないという課題、調査協力者が刺激コメントを性役割期待として受け取ったのか単なる期待として受け取ったのか判別できないという課題の2点である。今後は受け手の認知面についても着目しつつ、実験方法を工夫した検討が必要である。次に、研究Ⅳでは、実験的に検討することを試みたが、実験参加者の人数において群に偏りがみられた。そのため、十分に検討できたとは言い難い。今後は、各性役割特性とパフォーマンス、伝統的性役割観の間には関連がみられるのかなどを検討することも視野に入れ、実験手続きの工夫およびサンプルサイズを増やすことが必要である。また、暗黙の性役割期待と類似性のある好意的性差別の研究において、受け手に影響を及ぼすプロセスとして、ネガティブ感情が意欲を低めている（森永・坂田ら、2017）ことなどが確認されている。したがって、今後、性役割期待を内包する言葉かけの影響プロセスを検討する際には、ネガティブ感情としての不安感についても考慮して検討していく必要がある。